
泥棒

磯田 大二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥棒

【Nコード】

N4243W

【作者名】

磯田 大二

【あらすじ】

泥棒になっていく青年。大工になっていく青年。それぞれの青春時代。

暗闇のなかを懷中電灯の明かりが右左を照らしながら通り過ぎていった。これで、守衛は二時間は来ない、それまでは大丈夫だ、と自分に言い聞かせた。

ウエストポーチから取り出したウィスキーのポケットビンをぐつと呷った。高ぶる気持ちが少し治まる気がした。ビンに戻して鍵を取り出すと入り口脇の小さいドアの鍵穴に入れてみる。回すと、カチャッと音がして扉が開いた。この鍵は下見の時、鍵穴にピッチを入れて型を取って作ったものだ。事前に試してはあったのだが、開くとほっとした。

そつと、敷地の中へ足を踏み入れて見渡すと建物は二棟になっていた。どこに事務室があるかは図面があるわけでもないし、むろん入ったこともないので、分からなかった。手前の建物に玄関があった。その建物を良く見て、二階に事務所があるような気がした。これは理屈ではない、ここにあるという気がするのだ。この神経が研ぎ澄まされた状況でピーンと感じるものがあるのだ。それを信じるしかない。入って、違っていたら、今日は素直に帰ろう、と決めていた。

(一)

「いらっしゃい！山村さん。ご無沙汰でしたね。どこかお出かけでしたか」

「ちよつと、出張で。大阪へ、半月もね。大変だったよ」

「ストーン」はバーにしては明るい気楽に入れる処だった。ママといても着物など着ていない。ブラウスにスカートという軽い格好

でお姉さんといったほうが似合う。カウンターに一人掛けボックス席二つだけの、飲み屋といったほうが良いようなお店だった。

山川哲雄は此処でバーテンをしていた。バーテンといってもどこかで修行したわけでもなく、カウンターでお酒を出す接客のお兄さんというようなものだ。それでも。始めてもうすぐ一年になると、カクテルやおつまみを随分と沢山出来る様になっていた。凝り性な哲雄は一度作ったものはノートにとっていたし、暇な時はカクテルの本を読んでいろいろ研究していた。こんな店ではカクテルなどあまり出ないのだがたまに出るとしっぴかり覚えていたし、読んでも覚えたカクテルをお客に勧めたりして覚えてたようだ。最近では、何処でも男性だけが飲みに来るわけではなく、女性のお客も大分増えてきたのでカクテルが沢山出来るのはママにとっても有難いようだった。

「大阪ってさ、今回初めてだったんだけど。食べ物がいっぱいあつてよかったよ。大体さー、安いんだよね。それで結構、美味しいんだよね」

「へー。何が美味しかったですか」

「キャベツ焼き、これが美味しい。これは屋台が多いんだけど、何処でも美味しいし安い。たこ焼きもそうだ。串かつとか土手焼きとか、美味しい物がいっぱいあるんだ」

「薄味とかいいですよ。どうでしたか」

「おそばやラーメンなんかおつゆは確かに色が薄い。でも、味はしっぴかり付いているんだよね。だから薄味でなくて色が薄いんだよね。それから、だしが違う、昆布なのかな。オレは口に合わないなんて無かったよ」

「それからさー。此方でも最近、立ち飲み屋さんが流行っているけど、向こうもそうなんだ、こっちより多いんじゃないかな。それが結構美味しいんだ」

「行って見たいですねー」

カラオケがあるのだが使う人は余りいない。専ら、ママと哲雄が

話し相手になっている。だからなのか、何時もお店は賑わっているのだ。哲雄も経験が浅いわりにお客のあしらいはなかなかものだ、営業マンにでもなったら結構いけるのかもしれない。

「いらっしやい、吉雄。今日は早いね」

「うん、早番で。さっき終わったからね。ビール頂戴」

「どうしたんだよ、元気ないね。吉雄らしくないよ」

「夏も終わって今頃になると、こんなことしていいのかわかって、そんな気がしてきてね。オレも二十歳になったんだぜ。入試もあるし、何時までもデパートのバイトしている訳にいかないからさ」

「そうだね、そろそろ勉強に専念しなければね」

二人は同じ年の友人だ。でも、同級生というわけではない。この町で知り合って。もう三年になる。山川哲雄が私立のY工高の三年の時、学校へ行きたくなくて駅前の「エリカ」という喫茶店で、サボっていた。そこに、やはり学校をサボって来ていた北川吉雄と知り合ったのだ。

「エリカ」は決して高級な店ではなかった。壁は板張りの濃い茶色、椅子は背もたれが高いボックスシートの、レトロな雰囲気のお店である。少し濃い目のコーヒーにピーナッツかアーモンドが付く。これが高校生にとってはとっても良かった。お店の人はお金さえ払えば余計な干渉はしないので、みんな、学校サボると良く此処へ集まってきた。吉雄も県立K高校の三年だったので、同じ年でなんとなく気が合って話が弾んだのがきっかけだった。

吉雄は出席日数が足りなくなるほどはサボらず、なんとなく授業をこなしていった。しかし、自分の将来には確固たる物は持っていなかった。こんなことではいけないと思うのだが勉強に力は入らない。とにかく大学に行こう、そうすればまだ考える時間はあるし何か新しい出会いが有るに違いない、と自分に言い聞かせていた。何とか高校は卒業はしたのだが、大学入試は上手くいかず、二浪していた。今はアルバイトをしながら来年の入試を目指している。このアルバイトもそろそろ止めて入試に専念しなければならぬ。

「でも、吉雄は入試は大変だけれど、夢あるよね。これを持ち切れば何でも出来るから。オレなんか、だんだんやれる事が狭まってくる気がしている」

哲雄の親は大工をしている。職人も二人使ってそれなりに上手くいつているので、哲雄が小さい時から経済的には恵まれていた。一人っ子で多少はわがままに育ったかもしれないが聞き分けの無い子という訳でもなくごく普通の子であった。少しおとなしいくらいの子だった。

親は跡取りとして大工にさせたいので、大学に行くのは反対で、高校を卒業したら大工の修行をさせたかった。哲雄も上の学校へ行って建築士の資格を取って、などと考えることもあった。でも、結局は親の言うとおりに、大工になる事にして、静岡にいる親戚の大工の処に住み込みで行くことになった。

叔父にあたる親方は昔気質でなかなか厳しい人だった。職人はまず掃除から、と言って、現場の片付けと掃除ばかりやらされた。部屋の中を箒で掃くのに、隅に埃が残ってはいけない。塵ひとつ無いようにはかなければいけない。現場というのは鉋屑とか切りくずとかいろいろなごみが出る。普通に生活をしている部屋とは違う。だから、一部屋で塵取り一杯どころで無い埃がたまるのだ。

「和室の掃除は終わりました」

哲雄は親方に言われたとおり掃除をして、残った材木や木っ端をきれいに片付けるのだが。

「何だ、これは。これでも掃除したのかよ。隅なんかごみだらけだろう」

何時もやり直しばかりであった。

毎日、朝から晩まで現場の中を片付けたり掃除をしたりして、その上、兄弟子から、此処を押さえろとか、その玄翁を取れとかお呼びがかかる。だいたい、言っている言葉を理解するのが大変だった。親が大工だったのでなんとなくは分かっていたのだが、イッケン、ニケンだとか、サンジャクサンズン、ロクシャク、だとか言わ

それでも、学校ではメートル法で習っていたので、なかなかピンと来ないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4243w/>

泥棒

2011年9月18日03時29分発行